

助成年度：平成5年度

[所属] 京都大学 工学部

[役職] 助教授

[氏名] 高橋 康夫

[課題]

都市と自然の関係に関する生活史的研究

京都とその山並みを事例として

[内容]

古代日本の山岳観念と中国大陸・朝鮮半島の影響については、日本との関係が特に深かった7世紀、飛鳥時代の朝鮮半島の状況について調べ、わずかな情報しかないにもかかわらず、都城から住空間までその影響の重要性をあらためて認識した。中世都市と自然との関係については、五山文学や洛中洛外図屏風を資料として、これまで行ってきた研究成果にいくつかの補足を付加することができた。

京都の都市史的な画期は、大局的にみると、平安京遷都、応仁の乱、明治維新、そして戦後であろうか。そして前の三つの画期においては、およそ百年程のうちに都市をめぐる自然（山並み・森林）とのあいだに新たな関係・意味を創りだし、伝統を積み重ねてきている。平安時代初期は、山並の美を見出して都を建設した。都市全体を更地としたのではなく、沼沢地や森林などもととの自然を残していたらしいし、山並みのヴィスタの保存に留意したこともあるし、また嵯峨野など自然の名所を発見した。中世には禅寺の「十境」を構成するものとして伽藍周辺の自然が注目され、また東山の松と西山の紅葉という対照的な自然景観が意識された。東山や西山などの自然に接して立地する多数の古社寺に対する参詣の盛行は、自然への親しみを増し、自然の名所を大衆化し、遊樂の地とする動きをもたらした。動乱の戦国時代は、洛中洛外の交流を象徴する万灯籠（現在の五山の送り火）を生み出した。近代は、山並の伝統を近代都市京都の骨格をなす新しい計画街路（遊覧道路）のヴィスタの要素として組み込んだ。

三山の景観は、歴史的・文化的に所産であり、京都盆地の開発が進むとともに、京都のまわりから「自然」はなくなっていった。京都をめぐる自然・歴史的景観の問題は、本源的に都市と山・森林のそれぞれのありかた、そして相互の関係のありかた、ひいては京都の将来像を問い直しているように思われる。

現在の、そして未来の京都の不可欠な自然要素として京都三山をどのように位置付けるのか。この点について明確な理念や展望をもちかえていないのが現況であろう。第四の画期、すなわち応仁の乱に匹敵するかのようにみえる破壊の時代20世紀はまもなく終わるが、21世紀には、はたして「自然」とのあいだにどのような関係を築いているのであろうか。こうした問題を考えるためにも、これからさらに本研究の課題を追求してゆきたい。